

詩 追憶のカイロ (6)

とよださなえ

以下の詩は、とよださなえさんが、NHK 記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』（2019年8月出版）から、作者の承諾を得て紹介するものです。

とよださんがカイロで暮らしたのは、今から50年近くも前のこととなりますが、その頃のカイロには、第4次中東戦争（1973年）後のざわざわした雰囲気と同時に、フランスやイギリス支配時代のヨーロッパ文化の名残を感じさせる、いわゆるスノビズムの面影がありました。当時も今も、近隣で紛争や内乱が止むときはなく、ジャーナリストとして多忙を極める夫君の仕事を支援しながら、エジプト人のメイドと運転手たちに助けられて、5歳と3歳の幼い子供たちを育てていました。

そのような暮らしの中から紡ぎ出された「ことば」の数々は、50年の時空を超えて、今日でも私たちの心を動かします。今、改めて「とよださんのカイロ」から、人の気持ちの変わらない優しさを読み取ることで、この分断した不安な世界をつなぐ何か暖かいものを感じることができるかもしれません。

今月の掲載詩は、「罰金を払わない車」です。

面白いテーマですが、こういった日常生活の中で目に入ってくる、あまり楽しくないテーマは、普通なら「詩」にはならないものですが、とよださんは、カイロの日常生活の中に人間味あふれる情景を取り上げて、「くすり」と笑わせてくれる風景を描いています。苦しい日常のなかで、ちょっとした反則を犯しながらも、誰も咎めない、緩やかな社会、日本からやってきた早稲田大学の車も、ちゃっかりとこのシステムに便乗しています。

罰金を払わない車

たった一頭のロバの曳く車に
人間が大小三十人も乗り
そのあえぎに負けずに
後ろからラクダがゆっくりと歩く
せまい道でもないのに

佇むより術のないメルセデスベンツを
無心に取り囲みながら
茶色く やせた山羊の大群がうごめく
炎天下四十度を越す 乾燥しきった
カイロの市街地
馬糞 人糞 山羊 らくだ その他諸々の糞が
粉末にされ
陽炎と風と共に 足元から立ちのぼり
人々の目も頭の中も不透明にする

手動で変えている信号機の傍らの
お巡りさん 月給四千円也
いくらアラビアパンが安いといっても
とても足りないお金
いつでも持っている
駐車違反の紙の束と糊
無秩序に並んでいる車に
熱心に貼りつける
車の中に人がいてくれた方が良く
その場で罰金 つまり小遣いが
自分のポケットのに入るから

お巡りさんに負けずに
ナンバープレートに小細工する人もいる
9の1所のペンキを削り取り
0に見せかけるとか

混沌とした中でも
とりわけ お巡りさんが驚くことが起こった
どうやって あのしつこい むつかしい
早稲田大学発掘隊所有のジープが
練馬ナンバーのまま
カイロ市内に上陸し 走りまわっている
アラブ民族主義にのっとり
ローマ字も減らそうという時
あるべきでない “練”という文字

何の印なのか

形を真似すべきか

とりあえず数字だけでも書き取るべきか

小遣い稼ぎに車に近づいたお巡りさんが

迷いはじめる頃

早稲田の連中

ヒエログリフの呪文もとなえず

逃げきるから

一度も罰金を払ったことがないという